

根無し草として生きる ショイヨド・ワリウツラとふたつの『赤いシャールー』

丹羽京子

はじめに

ショイヨド・ワリウツラ (Syed Wailullah, 1922-71) はバングラデシュを代表する作家であり、その作品『赤いシャールー (Lalsalu)』(一九四八) はバングラデシュ文学の白眉と言われる小説である。ではそのバングラデシュ文学とはなにを指すのか。

バングラデシュの建国は一九七一年で、それ以前はこの地はパキスタンの一部(東パキスタン)であった。そしてさらにそれ以前、分離独立の一九四七年までは、この地は英領インドの一翼を担い、現在のインド、西ベンガル州(二〇一六年現在、ベンガル州に改称の手続きが進められている)とともにひとつのベンガルを形成していた。ベンガル文学には、その言葉が今日につながる形になった紀元後およそ一千年から現在まで、ベンガル語で書かれたものすべてが含まれるが、一九四七年にベンガルが西と東に分かれて以降の東側の文学はさらにバングラデシュ文学として括られる。この東側は、四七年から七一年までは、パキスタンだったわけだが、この時代のものでパキスタン文学と呼ぶことはない。なぜならこの地域では一貫してベンガル語が用いられ、当時の西パキスタン、現在のパキスタンと

はおおよそ異なる文学潮流に属しているからである。

ヒンドゥー教徒がマジョリティーである西ベンガルに対して、イスラム教徒がマジョリティーの東ベンガルおよびバングラデシュの文学は、ベンガリ・ムスリム、すなわちイスラム教徒であるベンガル人と深く関わり合っている。ただし、バングラデシュには少なからぬヒンドゥー教徒だけでなく、その他の宗教に属するか、無宗教を標榜する人々も暮らしているわけで、現在のバングラデシュにも非イスラム教徒の作家が存在する。それゆえ、ベンガリ・ムスリムの文学とバングラデシュ文学はイコールのものではない。それを踏まえた上でベンガリ・ムスリム文学についてごく簡単に述べておく。

近現代ベンガル文学の初期において、その中心を担ったのもっぱらヒンドゥー教徒の作家や詩人たちであり、イスラム教徒のベンガル文学への参与はずっと遅れてスタートした。当初、ベンガルのイスラム教徒においては、近代文学の担い手となる中間層(中産階級)が薄かったという事情もあるが、アッパ・ムスリムと呼ばれる貴族的な階層では、正統的と考えられるその西方からの出自を誇って、長らくペルシャ語やウルドゥー語が使われてきたこともその理由のひとつである。そして圧倒的多数の比較的新しく改宗した庶民層は、その当時、読

み書きに親しんではいなかった。

本論で取り上げるワリウツラは由緒ある家系の出身で、身内に知識人も少なくなかったが、そうした事情もあつてベンガル文学との関わりはワリウツラ以前には見出すことができない。例えば、ワリウツラの伯母はウルドゥー語詩人として名を馳せていたのである。そして世代が代わり、ワリウツラはベンガル語作家となり、それまで正面から取り上げられることのなかった「ムスリムの村」を描くことにこだわり続けた。

しかしそのワリウツラはベンガルに帰属することを熱望しながら国家としてのバングラデシュの一員となることはできなかった。本論では、このワリウツラという作家の数奇な生涯と、そのワリウツラが生み出した物語の特異な主人公を重ね合わせるようにして、その代表作『赤いシャール』を読み解くつもりである。

一 アウトサイダーとしてのシヨイヨド・ワリウツラ

シヨイヨド・ワリウツラは、一九二二年に現在のバングラデシュ東部の都市、チッタゴンで生まれた。ワリウツラの家系はチッタゴンの出身ではあつたが、当時の英領インドにおいて父が官僚を務めていた関係で転勤が多く、ワリウツラは東ベンガルのさまざまな土地で暮らしつつ育っている。三十年、八歳のときに母を亡くし、父はその後再婚した。ごく若いころは画家を志していたが、父はその芸術家志向をあまり快く思っていなかったらしい。成績は優秀で、順調に学業を続け、四三年にモ

エモンシンホ（現バングラデシュ国内の都市）のアノンド・モホン・カレッジより学士号を取得。同年にさらに修士課程で学ぶため、コルカタ（旧カルカッタ）のカルカッタ大学に進む¹。専攻は経済学。このとき初めてワリウツラは地元東ベンガルを離れ、西ベンガルに暮らすことになる。また一人暮らしをするのも初めてだったが、このコルカタ時代の数年間は、その後のワリウツラにとつて大きな意味を持つことになる。

ワリウツラはごく若い頃から文学的な創作を試みていたが、それが本格化するのにはコルカタ時代である。四三年から四七年の四年弱の間、ワリウツラはコルカタにあつて当時の第一線の文学者と交わり、文学サークルに参加し、本格的に創作活動を行うようになる。交わつた人々の多くはワリウツラにとつての異教徒であるヒンドゥー教徒や共産主義者であつたが、セキユラーでリベラルなワリウツラはまったくそのことを苦にしていなかった。それどころか、基本的に内気で知られるワリウツラが最も積極的に人と関わつたのはコルカタ時代だったのである。

四五年に父が亡くなると、ワリウツラは大学を辞め、現在も続く有力英字新聞ステーツマン（*The Statesman*, 1875-）の編集補佐となる。この時点まで一歩もベンガルの外に出たことなかったワリウツラだが、こうしたポジションに就いたことからわかるように、もともと英語には非常に堪能だつたようである。ワリウツラの父は英文学で修士号を持ち、また英領インドの官僚であつたので、英語の必要性を身にしみ感じていただろうから、息子たちの英語教育に力を入れていたとしても不思議はない²。

四五年には初の短編集をコルカタで出版し³、そして同じこ

ろ、本論で取り上げる『赤いシャール』も書き始められた。ワリウツラは機会があれば草稿を朗読し、意見を仰いでは書き直していたという⁴。おそらくワリウツラはそのままこの処女長編小説もコルカタで出版するつもりだったろう。しかしそこにとんでもない事態が持ち上がる。分離独立である。それまで仮にもひとつであったベンガルは、このとき東と西に分断される。そして東ベンガル育ちで、家族もみな東側に暮らすワリウツラはコルカタを去るしかなかった。

パキスタンとなったダッカに戻ったワリウツラは、ラジオ・パキスタンに職を得る。『赤いシャール』はほとんど完成していたが、出版の見通しは立たない。この分離独立の混乱の時期に、まったくの新人の長編小説を出そうという出版社がなかったことは容易に想像できる。結局のところワリウツラは、伯父の助力を得て自ら立ち上げたコムレード・パブリッシャーズ名義で四八年にこの作品を自費出版する。しかし反響はまったく得られなかった。

一九五十年にワリウツラはカラチに転勤となる。ちなみに二十八歳のこのときがベンガルを離れた最初であったが、これ以後七一年に亡くなるまで、ワリウツラはほとんどベンガルで暮らしていない。しかしそれは必ずしも彼自身が望んだことではなかった。カラチ時代以降、ワリウツラは主に広報の分野で外交畑の仕事に就き、ごく短期間のニューデリー勤務を経て五二年より当時シドニーにあったパキスタン大使館に勤めることとなる。そのときに出会ったのがこの夫人であるフランス人のアンヌ・マリイである。彼女は当時パキスタン大使館の向かいにあったフランス大使館で働いていた。ちなみにアン

ヌ・マリイはアメリカ留学の経験を持ち、非常に英語に堪能だったようで、二人のコミュニケーションは基本的に英語でなされていた。その後ワリウツラは五五年には再びカラチ勤務を命じられ、それを機に二人は結婚。そしてまた同年ジャカルタ転勤を命じられている。

結婚し、比較的安定した仕事に就きながらワリウツラの文学への思いは依然として強く、このころ鬱々とした気持ちで過ごしていたらしい。ある友人に「こういう外交官としての仕事はまったく空虚で意味がない。わたしは子どもころからずっと望んでいた、なんらかの価値のある作家になるという夢を実現できそうにない」と書き送っているのである⁵。

転機が訪れたのは、六十年の『赤いシャール』の再販⁶であった。十二年前に黙殺されたこの作品が今度は絶賛され、翌六一年には権威あるバンングラ・アカデミー賞を受賞するのである⁷。こうしてついに第一線の作家として認められたワリウツラだったがしかし、このときすでにその生活の軸足はベンガルを遠く離れてヨーロッパに置かれようとしていた。『赤いシャール』の再評価をよそに、ワリウツラ本人は、五八年暮れにジャカルタからいったん帰国するものの、すぐにまた転勤を命じられ、カラチ、ロンドン、ボンを経て六一年より一等書記官としてパリのパキスタン大使館に勤務するに至っている。以後、ワリウツラは七一年に亡くなるまでのほとんどをパリで過ごす。六十年の『赤いシャール』再版時も、ワリウツラ本人はダッカで過ごすことはなかった。こうしてワリウツラは、ダッカを中心とする東ベンガルの文壇に実質的に参加する時期を逸してしまったのである。

それでもこの受賞に意を強くしたであろうワリウツラは、第二作『新月』を執筆、この作品は六四年に出版された。そして次の三作目にして最後の長編小説『泣け、河よ、泣け』も六七年に発表されている。しかしこの二作は、その洗練された手法が認められると同時に、「ベンガル小説らしくない」と評されることもしばしばである。のちに改めて述べるが、ダツカを中心とする文壇に属していないワリウツラは、どこか異質なものとして見られる傾向があり、それが評価に微妙な影を落としている。

実際問題として、すでに妻子を持ち、さらに妻がフランス人であるワリウツラが現職を捨てて不安定な文学の場に飛び込むのはむずかしかつただろう。特に六十年代の東ベンガルは政治的にも経済的にも暗い時代であり、だれであつても文学で生計を立てていくことは難しい時代であつた。しかしワリウツラのパリにおける現職にもその不安定な波は押し寄せる。六十年代を通して東ベンガルすなわち東パキスタンはいよいよ独立へと傾いていくのだが、その流れの中で、ワリウツラは六七年にパキスタン大使館を辞職せざるをえなくなつていく。ベンガル人としてパキスタン政府の立場を代弁することはもはやできなくなつていたからである。とりあえずはユネスコにポストを得るが、それも任期付きのものであつた。六九年にはいったん帰国、一家で暮らすための家を購入するが、ますます国の情勢が不穏になるのを見て、家族を伴つての帰国を延期する。そして七十年にはユネスコでの任期も切れ、一家の生計は妻であるアンヌ・マリーが担うようになる。そうした中、七一年三月にバングラデシュ独立戦争が始まるのである。この時期、母国

を遠く離れ、失業してなすすべもなく日々を送るワリウツラの心境は察するに余りある。そのストレスが引き金になつたことは間違いない。同年十月に突然心臓発作を起こしてワリウツラは帰らぬ人となる。悲願のバングラデシュ独立の二ヶ月前のことであつた。

このような生涯を送つたワリウツラの作品数は多くない。すでに言及した三本の長編小説と、短編小説集が二冊、そして四本の戯曲がそのすべてである。そのほかには異なる時期に雑誌に発表されたごく短いエッセイなどが数本あるだけで、また国の情勢が不安定であつたことと国外に長く暮らしたせいでも一時資料も非常に乏しい。

その少なからぬ一時資料である手紙類で目を引くのは、そこに繰り返しあらわれる孤独感である。例えば「わたしは恐ろしいほどに根無し草的で、疎外されていると時に感じるものがあつた。わたしにはなぜこんな仕事をしなければならぬのかわからないし、わたしには友だちもいない」という発言のように、社会あるいは文壇などの特定の場合からの疎外感、仕事への違和感、そして友人がいらないという訴えは随所に見られる。

ワリウツラはこうした疎外感、孤独感を終生感じ続けた。そしてその根無し草的な感覚は、間違いなく彼の代表作『赤いシャール』に反映されている。

二 アウトサイダーとしてのモジッド

ワリウツラの処女長編小説にして代表作の『赤いシャール』

ルー』は、さまざまな点においてそれまでになかった独創的なベンガル小説だが、ここではその主人公に焦点を当てて見ていくことにする。

この物語の主人公モジッドはモウロビ（イスラム教聖職者）である。彼は貧しい村を出て居場所を求めてさまよい、辺境地域を経て比較的豊かなモホッポトノゴル村に辿り着く。モジッドは打ち捨てられた誰のものとも知れない墓をピール（神秘主義系の聖者。しばしば神秘的な力を持つていとされる）モダツチェルのものだと称して村人を叱責し、そこにマジヤル（聖廟）を建てて自らの居場所を作り出し、そのコーランの知識と巧みな話術によつて次第に人々を支配するようになる。モジッドはこの詐欺的行為を「この世で一日二回しつかりと食べるためにしなければならぬゲーム」と自覚しているが、自らの権威を維持するために「本物の」ピールと対決し、村の有力者であるカレク・ビヤパリを離縁させ、さまざまな嘘を重ねるうちに、自分が構築した偽りの信仰の場に自分自身からめとられてもいく。終盤、二番目の妻、ジヨミラをどうあつても押さえつけることができず、加えて村が嵐に襲われると、モジッドの世界は綻びを見せ始めるが、モジッドの嘘が白日の下にさらされることなく物語は終わる。

ワリウツラは、この特異な物語の主人公を自分が目撃したちよつとした出来事から思いついたらしい。そのきつかけについて、ワリウツラは次のように語っている。

チョットグラムのわたしたちの村の家の近くでこのような出来事を見かけたことがある。ある人が突然土の盛り上がったと

ころに漆喰を塗って赤いシャール（聖なる布）を広げ、人々からお金を集め始めたのだ。そして信じやすい通行人が、さまざまな願い事とともにお賽銭を置いていった。わたしたちの国にはこのような「聖地」がたくさんある。それはもちろんイスラムでは禁じられたことではあるが、それでもこうした「商売」は広く行われているのだ。このような商売人の知恵と欺瞞をわたしは知りたい。そしてある種の愛情のもとに彼らを捉えたい。それがどのようにしてできるかはまだわからないが、やってみるつもりだ¹⁰。

しかし実際に書き進めていくと、物語のモジッドは、単なる商売人の知恵と欺瞞をあらわすキャラクターを大きく超えていく。最終的に『赤いシャール』はバングラデシユの社会全体を射程に入れ、貧困や人間の心理、そして信仰と欺瞞について重層的に描いた作品となっている。

さてこのモジッドはどこから来てどこにたどり着いたのだろうか。作中の実在の地名は、モジッドにとって通過地点となるガロ山脈付近のみである。であるから物語の舞台は読者の想像に委ねられるわけだが、いくつかのヒントも隠されている。まず、モジッドの出身の村は「収穫よりもトウピ（ムスリム帽）の方が多し。稲よりも信仰の草が生い茂る」¹¹と簡潔かつ効果的に語られているが、バングラデシユの読者はこの地をバングラデシユ東部のノアカリあたりと読み解くことが多い。実際にノアカリであるかどうか特定することはできないが、バングラデシユに暮らすものなら、この地がより東側に位置するであろうことは即座に理解する。このわかりそうでも明確には地名が特

定できない構造は、モジッドが辿り着き、物語の舞台となるモホットノゴル村の記述でいつそう顕著となる。ここもまた、具体的な米作の様子を描かれながら、その実際の場所を特定することはできない。さらに作中で人々の話すことばも、それが方言であることは明らかでありながら、どこの方言であるかは特定できない仕組みになっている。

ワリウツラの生地、チョットグラムはノアカリに近く、またワリウツラは実際にノアカリに住んだことがある。そしてまたワリウツラは、ノアカリ方言を用いて短編を書いたこともあるので、ここでは意識的にそれを避け、場所を特定できないようにしたことが見て取れる。しかしそれと同時に、ここでのモジッドが東から西へ移動していることは明らかで、それは総じて貧しい村から豊かな村へ、そしてバングラデシュの風土を背景にすれば、厳しい原理主義的信仰の世界から緩やかな神秘主義的信仰の土地への移動として描かれている。

さて、このモジッドとはいかなる人物だろうか。彼は明らかに詐欺を働いてはいるものの、職業的な詐欺師ではなく、自らが語るほどの特別な存在ではないにせよ、聖職者として一定の役割を果たすのに不足があるわけではない。モジッドの罪はひたすら自らが作り上げたマジナル（聖廟）を巡る騙りと、それがもたらす偽善にある。このモジッドの偽善はもちろん、モホットノゴルの村人に害をなす。確たる理由もなく離縁されるカレクの妻、アメナ・ビビや、モジッドのことばを信じて悪魔と呼ばれたピールを襲撃しに行き、逆に怪我を負ってしまう村人などである。しかし彼らはなぜそれを信じるのか、なにか、しかも不合理ななにかを信じようとする心理がそこには隠さ

れている。そしてまた、モジッドの欺瞞は、モジッド自身をもがんにがらめの状況に追い込んでいくのである。

モジッドは、まるでその人物のことを知る由もない墓を利用して。作中に、モジッドがふとこのモダツチェルなる人物を自分は知らないということに思い至るくだりがある。同様に、彼は長年共に暮らした最初の妻、ロヒマのこともわからな

いと思ひ、二番目の妻ジョミラはまったく彼の理解を超える存在である。つまり周りを嘘で固めたモジッドは、だれとも（死者とすら！）、心を通わせることはできないのである。モジッドはモホットノゴル村で権勢をふるいながら、最後までその村を自分の村と思うことはできない。これも作中に表現されていることだが、その村はモジッドにとって舞台に過ぎないのである。つまりモジッドは自らのついた嘘ゆえに絶対的な孤独のなかにあり、その孤独は、多くの人に囲まれていても、モジッド自身はその彼らとともにはいないところにある。

このモジッドの孤独のありようには、作者ワリウツラと重なる部分がある。夫人であるアンヌ・マリー宛のワリウツラの手紙を見てみよう。

わたしの本やわたしの書いたものに関して君はこういう質問をしたね。それは確か、わたしは村や村の人々について書いているが、わたし自身、ゴリーキーがそうだったように、彼らとともにあるのかということだったと思う。彼らについて書くのなら、彼らとともにあらねばならないと君が思っているかどうかはわからない。だけど、わたしにとつてそんなことは不可能なのだ。村の人々について書くからといって、どうしてわたし

な時期に、新人作家としてデビューするというのは無理な話であつたろう。そしてダッカに新しく文壇が形成されていく時期には、ワリウツラはそこにはいなかったのである。

すでに生涯を辿つたことで明らかのように、ワリウツラの文学上の活動時期は、ほぼパキスタン時代（一九四七―七二）と重なっている。これはつまりベンガル文学のなかの「バングラデシュ文学」の概念の形成期にあたるわけで、ワリウツラの評価はまさにそうした動きに左右されてきた。分離独立、そしてパキスタンへの参加は、ある意味ベンガル人であるよりもイスラム教徒であることを優先させた結果でもある。事実、ごく初期の「バングラデシュ文学」は、その内実について精査の必要はあるにせよ、より「イスラミック」であることに特徴があると考えられている。しかしその後この地の人々のアイデンティティーは再びベンガル人であることに大きく振られていく。バングラデシュ独立への歩みは、五一年のベンガル語国語化運動（ウルドゥー語をパキスタン唯一の国語に制定することに反対した運動）に端を発しているが、五十年代、六十年代を通して、この地はイスラム教徒であることよりも「ベンガル語を用いるベンガル人であること」を強く意識し、自らのアイデンティティーを構築していくこととなる。そうした潮流の中で、同じベンガル人であるものの、西ベンガルとも異なる「我々の文学」が求められていくのは当然の帰結であり、六十年代になると文壇の風向きが変わってくる。そしてそれがムスリムの村を描いた『赤いシャール』への追い風となつたことは間違いない。本作はコルカタの文壇で鍛えられつつ書かれた作品であることから同時代の東ベンガルの作品に比べて完成度が高く、これを「バ

ングラデシュ文学」の代表作と位置づける動きが高まつていったのである。

しかしこのように『赤いシャール』が不動の地位を獲得するようになつてもなお、作者であるワリウツラへの眼差しには複雑なものがあつたようである。ワリウツラはその後半生を海外、特にヨーロッパで暮らしたことから「西洋化した」作家と見られることがしばしばある。特に後期の二作品、『新月』と『泣け、河よ、泣け』は同じく東ベンガルの農村を描いたものでありながら、それらがヨーロッパ滞在中に書かれたこともあつて、『赤いシャール』とは異なつた留保条件付きの評価になつていることが見て取れる。例えば、自身第一線の作家であり、優れた文芸評論も多数上梓しているハッサン・アジズル・ホク（Hasan Azizul Huq, 1939）は、『赤いシャール』をまぎれもないバングラデシュ小説の代表作としながらも、後期二作品については「異国に暮らし、風変わりなベンガル語で書いたヨーロッパ風の小説」¹⁴と結論づけている。

Chawdhury, 2007 には、ワリウツラ作品の評論、特に西洋文学との関連を論じたものの比較的詳細なリストがあるが、それを一瞥するだけでもいかに地元バングラデシュではワリウツラがヨーロッパの作家と比較されているかがわかる。ちなみにワリウツラとの関連で挙げられる名前はサルトル、カミュ、ジョイス、カフカ、コンラッド、ウルフなどであるが、ワリウツラが最後の十年間をパリで過ごしたことで、その中でもサルトルおよびカミュとの関連が特に評者の関心を引くことが多いようだ。カミュはワリウツラがパリに行く直前に亡くなつているが、サルトルはワリウツラがパリにいた六十年代を通して活

躍っていたので、そこに関係性を見出そうとするのもあながち無理な話ではないのかもしれない。しかしこれらの評論は、上記の作家たちの作品とワリウツラの作品、特に後期二作品との類似性を指摘しているものの、その多くは単に「似ている」以上の事実を引き出してはいない。

実際のところ、ワリウツラがどれほどこれらヨーロッパの小説を意識していたかは推測の域を出ない。ワリウツラが英語に堪能であったことは確かだが、そのフランス語力はそれには遙かに及ばなかつたと考えられる。もちろんワリウツラには業務上必要なフランス語力は備わっていただろうし、ごく短いながらフランス語で書いたエッセイもある¹⁵。しかし夫人の証言によれば、ワリウツラはほとんどの書物をベンガル語でなければ英語で読んでいたという¹⁶。

むしろこうした論評、ワリウツラ作品を西洋文学と関連付けようというというものの多さは、ワリウツラの後期作品をバングラデシュ文学の主流から排除しようとする動きのようにも見える面もある。ワリウツラの西洋文学の関わりの実態はいかなるものであつたのか、我々はここでもまた、一時資料の乏しさという壁に阻まれる。少なくともワリウツラは文芸評論の類をまつたく残しておらず、西洋文学について第三者と論じた痕跡もほとんど見出すことができない。また作家になるといふ夢を抱いていた幼い頃から始まって、学生時代を通して、なんらかの欧米の作家や詩人に傾倒したというエピソードも見出せない。そもそもワリウツラがパリに暮らしたのは自身がそう望んだからではなく、ワリウツラは常に母国に帰ることを希望していたのである。

ワリウツラが「西洋化されている」と批判されていることに對して、ワリウツラの近親者は敏感に反応している。ワリウツラの兄は「わたしは彼が書いたものがヨーロッパの文学や文化に影響を受けているとして、彼が国際的にも評価されているにもかかわらず、そのベンガル文学における地位を貶めようとする評論家がいることに驚きを禁じえない。彼は長いあいだ外国に暮らし、外国人と結婚し、洋服を着ていたかもしれないが、本物のベンガル人であり続けた」¹⁷と語っている。ワリウツラ夫人のアンヌ・マリーも、ワリウツラが「西洋化されている」という批判に対して以下のように述べている。

彼が西洋化されているとする批評家たちは間違っています。彼は子供時代から青年時代に至るまで、全面的にベンガルで育ちました。：（中略）：彼は飽くことを知らない読書家で、学生時代にすでにたいがいものを読んでいます。そして彼はそうしたものに関してダッカの友人たち、ヌルッディン、シヨナウル・ホク、シヨオカト・オスマン¹⁸、ムニル・チョウドリ¹⁹などと議論してきました。世界のすべての文学は、ソフォークレスであれ、ヴォルテールであれ、タゴールであれ、世界市民としての彼とともにありました。そして彼はそうしたすべての思想や方法を、彼自身の文化や人々、つまりベンガリ・ムスリムの村に当てはめようとしたのです。彼は作品を通して、できる限り自国の貧しさや後進性に貢献したいと願っていました²⁰。

夫人からはワリウツラが特に入れ込んだ特定の作家や作品の名前は挙げられていない。むしろ夫人は、ワリウツラの乱読ぶ

りを強調しており、ほとんどのものは読んでいたものの、それ以上でもそれ以下でもなかったという印象を受ける。

また夫人の述べるところでは、ワリウツラはヨーロッパでは、イスラム文化の痕跡の残るアンダルシア地方に憧れており、イスラム文化の素晴らしさを力説するとともにベンガリ・ムスリムの近代化が遅れたことをいつも嘆いていたという。さらに夫人はワリウツラの交友関係についても語っているが、ワリウツラはどこに暮らしてもほとんどベンガル人としか付き合わず、フランスの文人などとの付き合いはまったくなかったらしい。パリで最も親しく行き来していたのは、コルカタ時代、ステーツマンで同僚であったシュディンドロナト・ドットの夫人、ラジェンドロ・ドットであったという²¹。

夫人は続けてワリウツラがいつもベンガルのことを語り、特に河の話を始めるときりがなかったこと、バングラデシュに、そしてコルカタに自分を連れて行ったがっていたことを回想しているが、そのような回想から異郷に暮らすワリウツラの様子がある程度蘇ってくる。おそらくワリウツラ自身もバングラデシュ文壇から阻害されつつあることを感じていたのだろう、彼は自分があくまでベンガルに属していることをしばしば主張している。例えば、『泣け、河よ、泣け』の批評が出た際には、近しい友人に「わたしの書いたものに少しでも親しんでいる人なら、こんな歪んだ論理でわたしのベンガル人性を否定しようとはしないでらう。君はわかっているだろうが、わたしは心も体もまったくのベンガル人だ。そしてわたしのすべての作品がそれを証明しているはずだ」²²と述べたとされる。そしてまた、このようにも述べている。「異国に暮らしていても、わたしは

心の中で自国に暮らしている。あるいはむしろ、時が経つにつれ、わたしはますますわたしの国の中へ中へと入ろうとしている。わたしはずっとそうしてきたし、おそらくわたしの村への希求はけつしてなくならないだろう」²³。

このようにワリウツラは異郷に暮らしながら、故郷の村を想い続けた。しかしその村とはどのような村なのだろうか。「農村文学」というジャンルを持つベンガル文学には、農村を描いたものが少なくない。そしてまたそのほとんどは、自らが育った具体的な村を背景にしたものである。翻ってみれば、転勤族の子どもだったワリウツラは特定の故郷を持っていない。『赤いシャール』の村が匿名性を保っているのも、実はこのジャンルでは珍しいことなのである。もともとそれは、この小説が普遍性を獲得するのにも一役買っており、作品の舞台であるモホットノゴル村は、ベンガリ・ムスリムであればだれにとっても「おらが村」になる可能性を秘めている。しかしその後のワリウツラはベンガルを離れ、その村はワリウツラの心の中だけに存在するものとなった。もしかすると、それが後期二作品への読者の違和感につながったのかもしれない。この激動の時期、ベンガルの村は刻々と変化し、ワリウツラの心はベンガルとともにあったとしても、その足はベンガルの地についてはいなかったからだ。

ともあれ、『赤いシャール』はワリウツラがこだわり続けた東ベンガルの村とそこに暮らす人々の物語であり、後期二作品とは異なりそのことに異議を唱えるものはいない。そしてまたある意味、この小説は主人公を通してワリウツラの根無し草的心情を写し出した物語でもあるわけだが、本稿では最後に、

その異なるヴァージョンを見てみることにする。

四 『Tree Without Roots』と『赤いシャールー』

まず『赤いシャールー』の英訳について基本的な事実を述べておく。この作品の英訳『Tree Without Roots』の初版は一九六七年だが、実はこれに先立って、一九六三年に夫人のアンヌ・マリーによるフランス語訳が出されている。これは原作が再版されてバングラ・アカデミー賞を受賞してほどなくの時期にあたる。ただし夫人はベンガル語が読めなかつたので、あらかじめワリウツラが英訳したものをフランス語に置き換えたとのことである。つまり、出版時期は後でも、英訳が先になされたこととなる。

のちに詳しく述べるが、この英訳と原作にはかなりの開きがある。英訳が非ベンガル人読者を意識したものであることを差し引いても、この二作品は全体としてその趣を大きく異にしている。実際、まったく同一の箇所を見つけ出すのがむずかしいほどなのだが、大きな違いを生んでいるのは、省かれた部分（これにも注意する必要がある）よりも付け足された部分によるところが大きい。問題はその改編がいつ行われたかについてだが、夫人の証言によれば、フランス語に先立ってワリウツラが英訳を行った際にすでに行われていたようである²⁴。

原作と英訳の二作品は、その違いからこれまでまったくの別作品として考えられてきた。またそもそも『Tree Without Roots』は英語作品なので、ベンガル文学の場では論じられること自体

がなかったと言つてよい。これまで多くの評論は、ワリウツラの処女作である『赤いシャールー』と後期二作品の質的違いについて論じてきた。そしてそれらはまた、前者がベンガルで書かれ、後者がヨーロッパで書かれたことから、そこに決定的な論拠がないにせよ、後期二作品とヨーロッパ文学の関連を指摘するものが多かった。しかし『Tree Without Roots』は、後期二作品と書かれた（訳された）時期がまったく同じであり、また同一の作品のヴァリエーションであることから、これらを比較検討することは、ワリウツラの精神的軌跡を掘り下げるためにはなおいつそう有用であると考えられる。

ともあれ、この二作品の異同をまず概観してみよう²⁵。まず、書き出しの部分ですでにその違いがかなり鮮明になるのでその冒頭部を引用してみる。

人ばかりがやたらに多く、土地のやせたこのあたりの人々の、どこかよそへ行きたいとはやる気持ちは、どんよりとした空まできりびりと震わせているかのようだった。家にはなにもない。分け合い、奪い合い、あるところでは殺し合いまでして、すでに万策はつきている。それで人々の目は外へ向く。この大河のむこう側へ、このジェラ（県）の外へ、どこかよその土地へ、あるいはもつと遠くへ。舟でも造って漕ぎ出そうとするもの、その視界は地平線などで遮られたりはしない。燃えるような期待、からつぽの家のげつそりするような失望が、その期待をさらに激しいものにする。遠くをみつめ、その目に期待を燃やす人々は、一瞬たりともじつとしていないことはできない。たった一日の辛抱も、首を吊るのと同じことだ。だから人々は走る。

走りまわる。(原作 p.9)

この土地には人が多すぎる。この土地、侵食され、すっかり損なわれた土地はもはやなにも産み出さない。彼らはそれを知っている。しかし彼らにどうしようがあるだろうか？その土地の隅から隅まですでに耕され、種が蒔かれている。年に三回米を植え、年に三回収穫する。そして唯一の現金収入をもたらすジュート、それからほかの作物、サトウキビに亜麻仁にマスタードにナタネに胡麻。土地は耕され、さらに耕され、種が蒔かれ、さらに種が蒔かれる。一年中どの季節も、毎日毎日、日の出から日の入りまで。休息はなく、平安もない。そしてさらに悪いことに、土地を肥やすようなものもない。腹をすかせたものたちが完全に吸い尽くしてしまうその土地には。巨大な河から毎年うねりとなつて押し寄せる洪水、それが残す沈泥だけがその土地が手に入れられるすべてなのだ。彼らはそれを知っている。けれども彼らは多すぎる。食べさせなければならぬ口が多すぎる。そして土地は十分にない。(英訳 p.3)

同じ事柄を語っているが、その多くは英語圏での読者を意識してのことだろう。英訳では「年に三回米を植え」や「巨大な川から毎年うねりとなつて押し寄せる洪水」などバングラデシュの読者であれば言わずもがなの説明が加えられているが、こうした「追加的説明」は全編を通して随所に見られる。このあと原文ではすぐに列車が村に入ってくるシーンになるのだが、英文ではこのような状況説明がしばらく続く。また、モジッドの「移動」が東から西である

ことは、原作では前述のように読者によって予測されることだが(原作に移動の方向に関する記述は一切ない)、英訳では明確に「西へ向かう列車」と記述されており、またモジッドのセリフの「わたしのやってきた南東の方」でも捕捉されている。しかしながら、この東から西への移動の意味、貧しく信仰の厚い土地からより豊かで緩やかな信仰の土地への移動がどれほど伝わるかという点、地元民ではない読者にはなかなか実感が持てないかもしれない。

この先には、バングラデシュの読者をしてノアカリを想起させる有名な文章があるが、その表現もかなり隔たったものとなっている。

本当に収穫はない。あつたとしてもごくわずかだ。収穫よりもトウピ(ムスリム帽)の方が多い。稲よりも信仰の草が生い茂る。朝早くからこれほどの数のモクトブ(イスラム初級学校)でさまざまな声が響くとは、ここはまるで神に選ばれた国であるようにも思える。(原作 p.10)

多分この地にこれほど多くのムスリム帽が存在するのは、この土地が人々を十分に食べさせられないからこそだ。食べ物不足はより強い信仰心をもたらす。神は言う。祈るときは頭を覆え、それが神を恐れる人間の印である。だから人々は薄い布地でできたムスリム帽で頭を覆う。それはしばしば縁に刺繍がほどこされ、ひっくり返った小さな白いボートのように見える。そしてそれが神への恐れをあらわすのだ。牛の数よりもムスリム帽は多い。稲の束よりもムスリム帽は多い。朝になると、コーラ

ンを学ぶモクトブ（イスラム学校）に集まる少年たちの唱和の
声で大気が引き裂かれる。そのとき、人はここが神の地である
と感じるに違いない。（英訳 p.5）

簡潔にして名文として知られる原文が、英訳ではまったく異なる
叙述となつて見ることが取れる。作者はまずムスリム帽
について説明し、そしてまた、より重要なことに、貧しいこと
がより強固な信仰を生み出すという相関関係を説明する。

逆に英訳では意図的に説明を避けている場合もある。例え
ば、原文のベンガル暦の月名は、煩雑になるのを嫌つてかすべ
て英訳では西暦に改められており、それに伴つて、総じて全体
の季節感が希薄になつている。例えばベンガル暦で「スラボン
月の終わり（原作）」とあれば雨期であることがわかるが、英
訳の *One day in the month of July* からは季節は伝わらない。また
モジッドの住み着くモホツポトノゴル村（英訳ではこの名前も
モホツポトプルに変えられている）も、その主力産品がジュート
であると語られ、米作にまつわる記述の多い原作に比して、農
作業にまつわるシーンが減つている。全体として、作者はその
英訳において、ムスリムの信仰のありようについての説明に多
くを割き、その代わり季節感や農作業に関する説明は省いてい
る印象を受ける。

次に、この物語の起点となる、モジッドが村の人々に初めて
マジヤルについて語る場面を見てみよう。

そして同時に理解した。この世で一日に二回しっかりと食べる
ためにしなければならぬゲーム、そのゲームがたいへんな危

険を伴つていふことを。疑問も浮かんだし、恐ろしくもあつた。
しかし集会でうなだれている人々の顔を見ながら、モジッドの
疑念は消えていった。あの喘息持ちの八十過ぎの老人の目を見
ても、そこにはひたすら恥じ入っている以外、なんの感情も見
いだせなかつた。：（中略）：モジッドは考える、神の僕であ
る自分は何も知らず、人生についてもなにもわかるわけではな
い。だからこそ、自分の過ちを神は許してくださいさるだろうと。
神の愛は無限なのだ。（原作 p.17）

なにはともあれ、と彼はひとりごちた。新しい生活が始まる。
そしてほんの一瞬、彼は自分のしようとしていふゲームが危険
なものになりうることを考えて恐ろしく思った。長いあいだそ
うしてやつていけるかどうかの疑念もわいた。しかし人々は素
朴で人が良さそうだ、と彼は自分を安心させようとした。彼は
しばしばその夜のことを思い出した。どんなふうにも人々が彼
前に坐つていたか、彼らの目は恥じ入るあまりにひたすら下に
向けられていた。彼は気分が良くなつた。我々はしばしば忘れ
てしまうが、と彼は自分自身に思い起こさせた。神はすべてを
許したもう。神は慈悲深く、神は人が自らを卑下し、後悔をもつ
て許しを求めれば、必ず許してくださいさる。（英訳 p.12）

この部分は比較的開きが小さいが、それでも自分を納得させよ
うとするありようには微妙に異なる点が見て取れる。ただし大
きく違うのは、このあと、原作ではモジッドが自らの行為を遡
巡するシーンがほとんどないのに対して英訳では繰り返して現
れる点である。英訳においては、モジッドは繰り返して自らの行

為に対する疑念を持ち、またそのたびにそれを打ち消している。

さて、こうした数々の表現上の違いよりも、原作と英訳の違いを際立たせているのは新たに追加されたシーンによるものが大きいのだが、それを見る前に削除されたシーンをまず挙げておこう。英訳において削除されたシーンは大きく分けてふたつある。そのひとつめは、村の若者アッカーが学校を建てたいと提案するシーンである。アッカーはいわゆる「近代的な」学校を村に建てたいと望むのだが、モジッドはすでに存在するモクトブ（イスラム学校）になんの不足があるのかと一喝する。原作ではこの学校をめぐるやり取りがいつの間にかモスク建設にすり替わることになるのだが、英訳ではそれとは関連なくモスクの建設が始まっている。

もうひとつがピール（イスラム神秘主義系の聖者）にまつわるエピソードである。ベンガリ・ムスリムにとつてピールの存在は大きく、ベンガルでのイスラム教への改宗も、大部分ピールによるものと伝えられている。ムスリムの聖職者にはさまざまなものがあり、モジッドもモウロビという聖職者だが、神秘主義系とされるピールはしばしば神秘的な力を備えていると考えられ、特別な存在である。また、東ベンガル（バングラデシュ）の特に西方ではピールの影響が色濃いとされ、この物語もその「西方」で展開する。原作ではある高名なピールが、モジッドの暮らす近隣の村を訪れる。その名声と威光に惹かれてみなが隣村に行くようになるが、モジッドもじつとはしておれず、くだんのピールと渡り合うことになるのである。このピールとモジッドとの対決場面は原作では一つの山場

になっているのだが、英訳ではそれがすつぽりと抜け落ちていく。ピールがまったく登場しないわけではないのだが、あくまでそれは背景に過ぎず、モジッドと直接に交わることはない。村の若者、アッカーとのやり取りであれ、ピールとのやり取りであれ、イスラムの教義に関わることになるので、煩雑な説明を避けたのかもしれないが、原作を知る者にとっては物足りなく感じられる個所ではある。

さて肝心の追加された新たなシーンであるが、それは大きく分けて三か所になり、それぞれこの物語の要となるエピソードに関わっている。その第一がハスニの母さん（英訳ではクルスムという名前で登場する。ちなみにベンガルでは、女性の名前を直接呼ばず、原作のように「だれその母さん」という言い方がしばしば見られる）の父を巡る顛末である。ハスニの母さんは、一児を連れて実家に戻ってきている未亡人で、常日頃その両親の激しい夫婦げんかに胸を痛めている。ハスニの母さんがモジッドの妻、ロヒマにそのことを訴えたのを発端に、老人であるその父親がモジッドに呼び出され、皆の前で叱責される。原作ではそれを恥じた老人が、二日間の断食のちに嵐の中を出て行ってそのまま行方不明となってしまうことでこのエピソードは締めくくられ、老人の生死は不明のままなのだが（ただし亡くなったことが暗示される）、英訳ではそのあとにさらなる結末が用意されている。英訳においても二日間の断食まではおおよそ同じ流れなのだが、そのあと、老人はモジッドのところへ赴き、マジヤルの脇で三日三晩飲まず食わずのまま佇んだのちに、その場で亡くなってしまふのだ。ここではただ老人が亡くなったことが明示されるだけでなく、その顛末を見たモジッド

ドがマジヤルの持つに至った力に恐れを感じ、それがいつか自分をも滅ぼすのではないかと危惧する一節が挿入されている。このモジッドの危惧は、のちに述べるエンディングに向けての伏線になつていると言えよう。

第二の追加されたシーンは、村の有力者カレクの妻、アmena・ビビを巡るエピソードにあらわれる。子どものできないアmena・ビビは、思い悩んだ末に近隣の村に滞在中のピールの力を借りようとする（これが英訳でピールが登場する唯一のシーンである）。自分ではなくピールに頼ろうとしたことを知ったモジッドは激怒し、アmena・ビビに子供ができないのはその腹に鎖が巻き付いているからで、それを自分が解くことができるかもしれないとして、アmena・ビビをマジヤルに呼び寄せ、儀式を執り行う。（ちなみに、モジッドの語る不妊の理由はまったくの彼のでつちあげである。）マジヤルにやつてきたアmena・ビビはしかし、途中で気を失つてしまう。モジッドはその事実を利用してアmena・ビビに咎のあることをほのめかし、カレクに離婚を促す。原作ではこのあとカレクは悩んだ末離婚を決意し、アmena・ビビが実家に帰つていくシーンでこのエピソードは終わっている。対する英訳は、儀式で気を失うまではほぼ同じだが、そのあとモジッドがカレクにアmena・ビビは罪を犯しているとはつきりと語り、それを受けてカレクがアmena・ビビに過去の罪について問いただすシーンが追加されている。アmena・ビビはこれと言つてなにも思い浮かべることができないが、夫に問い詰められ、自分でもあれこれ考えるうちにしだいに神経衰弱のような症状を見せるようになる。そうした事態を受けてカレクは結局彼女を実家に帰すしかなくなるという結末である。こ

の部分は先に述べたエピソードと異なり、特にエンディングにつながるものではないためか、やや突出した印象を与えたとさえなくもない。ただし、不自然というほどではなく、モジッドによつてアmenaの罪を言明されたカレクは、その罪について知らなければならぬと思ひ詰めるのであり、それまで夫婦の会話など無きに等しかったカレクがなかなかそれを口に出せない場面も加えてある。逆に、原作において数少ない心理描写ともいえる、アmena・ビビが籠に乗つて実家に戻る際、村はずれの木をふと目にして涙を流すシーンは英訳では割愛されている。代わりに二番目の妻のタヌがアmenaを思いやつて涙を流すのである。

そして最大にして最も重要な追加的シーンは、物語の最後にあらわれる。まずは原作のエンディングを説明しよう。どうしても二番目の妻、ジョミラを思い通りに動かせないモジッドは、ついに彼女をマジヤルに閉じ込める。そこへ嵐がやつてきて、雹が降り始め、ロミラに懇願されてジョミラを解放したモジッドだが、ジョミラに同情的になつているロヒマに苦言を呈さずにはおられない。そのあと、外に出たモジッドは田畑の惨状を目にし、人々の嘆きを聞くことになる。この惨状、嵐だけでなく、ジョミラを巡る顛末を受けて、モジッドは一瞬なにかが変わりそうな予感を覚える。

モジッドはほど遠くないところで、困惑したまま立ち尽くす。まもなく審判の日が訪れる。まもなくモジッドの中で、なにかがひっくり返ろうとする。この奇妙な人生のはじめから終わりまで、彼の目の前にはつきりとあらわれ、そして真実との境

界に達すると、この世に生まれるときのような苦しみが心に押し寄せる……。

しかしモジッドは、最後までその道を避け、自分自身を守ろうとした。(原作 p.135)

こうしてすべてが「ひっくり返る」チャンスは失われ、モジッドはモジッドのまままで結末を迎えることとなる。その結末部分は以下のとおりである。

「罪深いことを言うものではない、神を信じるのだ。」それ以上だれの口からも、なんの言葉もついては出なかった。目の前には田んぼが広がり、そこにはただ稲が折り重なって倒れている。人々はそれを見つめる。その目にはなんの感情も浮かばない。その目は信仰という石に、神その人が刻み付けた目である。(原作 p.136)

この最後の一文、「その目は信仰という石に、神その人が刻み付けた目である」を巡っては、さまざまな解釈が出されているが、総じて運命に対して無力であり、信仰の名のもとに、感情も意志も失っている人々をあらわしていると考えられよう。さて対する英訳だが、ジョミラおよびロヒマとのやり取りを経てモジッドが外に出ていくところまでの流れはほぼ同じであるものの、このあとにまったく異なるエンディングが用意されている。モジッドはまずカレクに会いに行くのだが、そこで人々がモジッドではなく、カレクに苦境を訴えているのを見

る。モジッドはとりあえず人々を立ち去らせ、カレクに神の摂理を説いたのちに田畑を見に行く。そしてそこで村人に会い、不穏な兆候を耳にする。このあと、マジヤルが村の比較的低いところにあることが説明されるが、物語ではしだいに水かさが増していく、洪水の前兆があらわれ始める。村そのものは高台にあつたため島のように残されたものの、雹のあとに残されたわずかな作物も水に飲み込まれていくのである。低地にあるモジッドの家とマジヤルも危険にさらされつつあつた。カレクが使いをよこし、自分の家に避難するようにと言ってくるが、モジッドはいったんそれを断る。マジヤルを守るためでもあり、またマジヤルになにか起こるはずがないというポーズのためでもあつた。しかしますます水高は増し、ついにモジッドは二人の妻を連れてカレクの家に行くことを決意する。物語の最後、水につかりながらカレクの家に向き着き、二人をカレクに預けるとモジッドはマジヤルに戻っていく。英訳の最終的な結びの文章は以下のようになっている。

彼はあたりを見渡すために立ち止まった。痩せて目の落ちくぼんだ男、なんの感情も浮かんでいない目、そのまばらな髭は夜明けのように青ざめ、ひ弱でちっぽけな人間が、広漠とした水の淵に一人立っている。そしてその水は、空の無限の広がり に溶け込んでいく。しかし彼はそこには一瞬しか留まらなかった。なぜなら今やモジッドにとって時間が貴重だったからだ。彼は戻らなければならぬ。確かな、そして素早い足取りで彼は歩き始めた。(英訳 p.136)

ここではその目に感情が浮かんでいないのは、人々ではなくモジッドである。原作では人々の無力感が最終シーンになつていくのに対し、英訳では、最終的な視点はモジッドに集約されており、言うまでもなくこの違いは、物語の意味にとつても大きな違いを生んでいる。

とりまとめれば、原作では、嵐によつてモジッドは一瞬すべてがひっくり返るような感覚を覚えながら、結局は自分の身を守り、そして最後のシーンでは、運命の前になすすべもない人々に視線が向けられている。それに対して英訳は、カレクを含めて周りの人々は背後に退き、モジッドが自らの意志で洪水の迫るマジヤルに戻つていくシーンで終わつているのである。英訳におけるモジッドは、自らのついた嘘に對置し、それに飲み込まれるのも辞さない姿勢を示すことによつて、ある意味、自分のついた嘘に対する責任を自ら取ろうとしているとも言える。そしてこれはこれである種の感動を呼ぶ結末となつて

いる。

以上のようにこのふたつの作品には多くの異なる点があるが、全体としての筆運びもかなり違つている。例えば、原作はベンガル文学としては例外的と言えるほどに、淡々とした乾いた文章で書かれており、登場人物の内面をことさらに語らず読者の想像に委ねられているのに対して、英訳では、その対象をモジッドにはつきり向けたうえでその心の内を感じさせる部分が追加されているのである。つまり、原作はモジッドを中心としながらも村全体、もしくは村人全員が物語の主題であるのに対し、英訳は明確にモジッドを主人公に据えていると言える。

こうして考えると、英訳『Tree Without Roots』はそれ自体、単独の意味を持つており、結局のところ、この二作品は、どちらが優れているということではなく、全体として異なる印象を与える別個の作品であると捉えるべきだろう。そしてそのうえで、最後に作者ワリウツラの、この作品に関わる姿勢の変化について簡単に考察してみたい。

ワリウツラが、故郷のチョットグラムで垣間見たマジヤルを巡るちよつとした詐欺的行為からこの物語を思いついたことは先に述べた。その際、ワリウツラは「このような商売人の知恵と欺瞞をわたしは知りたい。そしてある種の愛情のもとに彼らを捉えたい」(前述)と語つていたのだが、完成した『赤いシャルル』はそうした商売人の知恵と欺瞞を語るというより、偽善者モジッドとともに、それに振り回される村の人々を描く鳥瞰的な物語となつた。それは、それ以前にあまり描かれることのなかつたムスリムの村の現実を描いたものとして高く評価され、モジッドという特異な登場人物によつて成立しているものの、ワリウツラの語る「わたしがよく知っている人々、その彼らこそがこの広大な社会や経済の織り成す世界の一部であるということを知つてもらうこと」(前述)を指す、それぞれが等価の存在感を持つ村人たちの織りなす物語となつたのだ。

しかし、この小説が認められ、英訳に取り組んだときのワリウツラの心境は、それとはまた異なつていたように見受けられる。そこには英訳ならではの変更が多々見受けられるとはいえず、英訳するという行為だけからでは説明できない大きな逸脱があつたからである。すでに明らかのように、英訳版『Tree

Without Roots においては、その焦点は明らかにモジッドにあっておられ、これは広大な世界の一部としての村の物語ではなく、なんとしても生きようとする、そして生きるための嘘に自ら進んで飲み込まれようとするモジッドの物語となっている。

ワリウツラの生涯を振り返ると、彼は『赤いシャールー』の執筆と初めの出版までの時期を全面的にベンガルで過ごしていた一方で、そののちはほぼ全面的にベンガルを離れて暮らしている。ワリウツラがベンガルの村を希求し続けたことについてはすでに述べたが、その村は、彼がベンガルを離れた五一年前後から変化することのない「心の中の村」だったとも言えるのである。であるから、これほど大きな改編がなされた英訳版でも、村の様子や登場人物とその振る舞いが変わることはない。このようにその舞台となる村が変化しない一方で、ワリウツラの心境はその十数年で変化し続けていたに違いない。いかに自らのベンガル人性を主張しようとも、その場にはいない、という事実、それは単純に「西洋化された」ということはまったく次元が異なることではあるが、その事実がワリウツラの意識に働きかけなかったとは考えられないからである。この変化、自分でも確とは語ることでできない変化が、主人公モジッドに反映されている、というのが、筆者の考えるところである。

おわりに

原作のタイトル、「赤いシャールー」は聖なる布を指し、この布のかけられたマジヤルが象徴的なシンボルとして原作の中心には位置している。翻って英訳の『Tree Without Roots』は明らかにモジッドその人を指している。そしてまた、「根のない」とはかつて友人あての書簡で自らを指して語ったことばでもある。モジッドはある意味、ワリウツラの心を映し出す鏡でもあったと考えられる。

もちろんワリウツラはモジッドのような「偽善者」ではなく、自らがアウトサイダーとなったのは運命のいたずらによるものであつて自らの行為の結果ではない。しかしそのアウトサイダー的なありようが重なっていることはすでに述べたとおりである。ただ置かれた立場が似通っているだけではない、その「移動」にも重なるところが見られると言えよう。つまり、モジッドもワリウツラも「東から西」への移動を強いられるが、それは自ら望んだことではなく、やむを得ない状況によつてもたらされたものだったのだ。そしてモジッドは移り住んだ「西」の村に自らの「東」的なありようを押し付けていくことになるのだが、ワリウツラははたしてどうだったのだろうか。もちろんパリのような大都会に、東ベンガルのありようを持ち込むことはできない。けれどもワリウツラは、夫人の証言のようにベンガル人としか付き合わないことで、そこにベンガルという場を持ち込もうとしたのかもしれない。

『Tree Without Roots』で、モジッドは自らの作り上げたマジヤルの幻想に飲み込まれることを——文字通り、洪水によつて溺れ

ることによつて——覚悟する。はたしてワリウツラも、自らの心の内に根付いた「想像上の村」にある意味飲み込まれ、そしてまたそれを、無意識にであれ、覚悟していたというものはあるだろうか。それに答えるためには、さらなる探求が求められるし、ワリウツラの後期二作品もあらためて検討するべきだろう。夫人はワリウツラが「clean man」を描きたいと常日頃語っていたと回想する。この「clean man」こそが、モジッドの対極に位置するキャラクターであり、それが二作目の『新月』の主人公となる。モジッドを明確に主人公に据え、その結末を描いたワリウツラが、次なる主人公として設定した人物、アレフ・アリを追うことによつて、ヨーロッパに暮らしたワリウツラ的心境がさらに読み取れるかもしれない。

注

- 1 兄であるシヨイヨド・ノシュルツラの証言による。資料によつては四二年にB.A.取得、翌年にカルカッタ大学に進学となつているが、傍証からも四三年が確実と思われる。Chawdhury, 2007, p.404.
- 2 *ibid.*, p.405. 同じく兄の証言によれば、自身も非常に英語に堪能だった父は、英語をマスターすることを強く勧めていたという。兄の印象では、ワリウツラが「単に英語が十分使えただけでなく、教養があり、いつもきちんとした服装をしたハンサムな若者だったので、二十三歳という若さで有名なステーツマンに勤めることができた」(訳文筆者)ということである。
- 3 Waliullah, Syed, 1945, *Nayaznagar*, Purbasha, Kolkata.
- 4 Maksud, 1981, p.31.

5 Chawdhury, 2007, p.155. 一九五六年九月十二日付、Nazmul Karim 宛の手紙。ジャカルタより送られたもの。

6 ダッカにある Kathabian という出版社がこの作品に目をつけ、六十年に再版。その際の紹介文には、『赤いシャール』は、今日では東ベンガルの優れた小説であると認められている。その語り的手法においてワリウツラが秀でていることにはだれも異論を唱えないだろう」と書かれていた。

7 実はワリウツラの文学関連の受賞はこれが最初ではなく、これに先立つ五五年、ダッカで開かれたベンクラブ国際大会の戯曲コンペティションにおいて、ワリウツラの「Bahipur (Bahipur とはある種の「ピールの呼称）」が二位を獲得している。ただしこの戯曲の台本が出版されたのは『赤いシャール』と同じ六十年で、出版元は Orient Romance Ltd. ワリウツラの戯曲も高く評価されているが、本稿では扱わない。

8 草稿や日記の類も残っていないワリウツラにおいては、手紙類がほとんど唯一の一次資料となるが、それもあまり多くは残っていない。例えばワリウツラの兄、シヨイヨド・ノシュルツラは、ワリウツラとは四百通以上の手紙をやり取りしたはずだが、度重なる引越や政変、自身の移住(ノシュルツラは後半生をカナダで暮らした)などですべて失われてしまったと語っている。このようにワリウツラが生きたのは未曾有の混乱の時期であったので、ごく簡単な事実を検証するのも困難な場合がある。

- 9 Maksud, 1981, p.349.
- 10 Mokammel, 2000, p.24.
- 11 Waliullah, 1999, p.10.
- 12 アンヌ・マリーへの手紙。Chawdhury, 2007, p.399. この手紙は五四年に一時帰国したダッカから送られたもの。
- 13 コルカタにおける『赤いシャール』の初版はずっとのちの一九八九年であり、西ベンガルではワリウツラは基本的に「バングラデシュの作家」

として扱われている。

- 14 Chawdhury, 2007, p.126.
- 15 Walullah, Syed, 1965, *Le System des Castes, Paris Review*, pp.75-80.
- 16 Chawdhury, 2007, p.396.
- 17 Chawdhury, 2007, p.406. フリウツラの兄へのインタビューより。
- 18 Shawkat Osman (1917-98) バングラデシュを代表する作家。
- 19 Munir Choudhury (1925・71) バングラデシュの劇作家、文芸評論家。教育や政治の分野でも功績を残した。

20 Chawdhury, 2007, p.396. アンヌ・マリーへのインタビューより。以下の部分も同様。

21 シュディントロナト・ドット (Sudhindranath Dutta, 1901-60) は、タゴール後を代表するベンガル詩人のひとり。フリウツラはコルカタのステーツマン時代に、同僚でもあったシュディントロナトと親しく交わった。夫人はインド西部のパンジャブ出身だが、タゴールが設立したシヤンティニケトンの学園に学び、よく知られたタゴールソング・シンガーであった。

22 Chawdhury, 2007, p.56. ショイヨド・ナズムッディン・ハシムへのインタビューより。

23 Makammel, 2000, p.11.

24 Chawdhury, 2007, p.409. この本の筆者はこの点について夫人に書簡を送って確かめている。フランス語訳のタイトルは *L'arbre sans raciness*. また夫人によれば、フランス語版『赤いシャール』は評判がよかったものの、再版されなかったという。

25 こつで用いている底本は、英訳版においては *Tree Without Roots, writers ink*. Dhaka, 二〇一〇年版 (タツカ版の初版は二〇〇五年でこれは第二版)、原作においては *Lalsalu, Cirayat Prakashan, Kolkata* 一九九九年版 (コルカタ版の初版は一九八九年で、これは第三版にあたる) である。英訳の初版は

Chatto and Windus, 1967) 翻訳者として名前が挙がっているのは Anne-Marie Thibaud, Qaisar Saeed, Jeffrey Gibian, Malik Khayyam の四人だが、夫人の証言によると事実上の翻訳者はフリウツラ自身で、なんらかの事情でフリウツラは自身の名前を出したくなかったと考えられている。なお、こつでの訳はすべて拙訳である。

参考文献

- Akhter, Sauda, 2001,
Syed Walullah Lalsalu o Anyanya Prabandha, Bangla Academy, Dhaka.
- Akhter, Shireen, 1993,
Bangladesher tin jan upanyasik, Bangla Academy, Dhaka.
- Ali, Jinat Imtiyaj, 2001,
Syed Walullah: Jibandarshan o Sahityakarna, Nabayug Prakashni, Dhaka.
- Chawdhury, Shamsuddin, 2007,
Syed Walullah Sahitye Pracya Prabah, Bangla Academy, Dhaka.
- Hamid, Shameena, 2001,
Syed Walullah Sahityakarna, shabdabyabhar o cetraprabhariti, Bangla Academy, Dhaka.
- Maksud, Syed Abul, 1981,
Syed Walullah Jiban o Sahitya, Minarba books, Dhaka.
- Mokammel, Tanvir, 2000,
Syed Walullah, Sisyphus o Upanyase Aitihya Jgyasa, Agami Prakashani, Dhaka.
- Syed, Abdul Mannan, 2001,

Syed Waliullah, agranthei racanaguccha, aprakashhi alokcitrabali, Abasar, Dhaka.

Waliullah, Syed, 1996a,

Upanyassamagra, Pratik, Dhaka.

Waliullah, Syed, 1996b,

Natksamagra, Pratik, Dhaka.

Waliullah, Syed, 1996c,

Galpasamagra, Pratik, Dhaka.

Waliullah Syed, 1999,

Lalsatu, Cirayat Prakashan, Kolkata.

Waliullah, Syed, 2010,

Tree Without Roots, Writers inc., Dhaka.

シヨイヨド・ワリウツラ、丹羽京子訳、二〇〇四年『赤いシャール』大
同生命国際文化基金。